

ページ	誤りの箇所	訂正
3	(1.1) 式の次の文「ここで, $\epsilon, \tau, \dots$ 」	ϵ を削除
4	$k(u, v)$ は u と v についてそれぞれ単調増加, 単調減少	$k(u, v)$ の係数は u , と v についてそれぞれ正, 負
5	(1) 「その力は $\phi(v)$ に比例する」	その力は $\nabla\phi(v)$ に比例する
9	(1.11) 式の左辺第 2 項「 $\frac{2-n}{2} \int_{\Omega} f(u)dx$ 」	$\frac{2-n}{2} \int_{\Omega} f(u)u dx$
12	下方「は,」と「をみたすので」の間の左の式	$\partial\bar{\Omega}_{\epsilon} = \gamma_{\epsilon}$
13	(1.23) 式の右辺第 3 項, 第 4 項	$-u\nabla a \cdot \mathcal{F}_p(x, u, \nabla u) - a\nabla u \cdot \mathcal{F}_p(x, u, \nabla u)$
15	(1.28) 式の右辺	第 1 項初めの - を削除
15	(1.28) 式の右辺第 1 項, 第 2 項	$\int_{\Omega} \{ \mathcal{F}(x, u, \nabla u)(\nabla \cdot \mathbf{h}) + \mathbf{h} \cdot (\nabla_x \mathcal{F}(x, u, \nabla u))$
16	中ほど「... とすれば, (1.23) の左辺は」と 「であり, ...」の間の式	$\nabla \cdot [\psi(x) \frac{x}{ x } (\frac{1}{2} \nabla u ^2 - F(u))$ $- ((\frac{n}{2} \frac{\psi(x)}{ x } - \frac{1}{2} \psi'(x))u + \psi(x) \frac{x}{ x } \cdot \nabla u) \nabla u]$
16	定理 1.4 の仮定に追加	$u = u(r), r = x $
16	定理 1.4 の結論の式	$-\frac{1}{2} \int_{\partial B} u_r^2 \psi ds = \int_B (\psi' - \frac{3\psi}{2r}) \nabla u ^2 - (\psi' - \frac{\psi}{r}) u_r^2$ $-\frac{1}{2} (\frac{n\psi'}{r} - \frac{n\psi}{r^2} - \psi'') u u_r - (\psi' + \frac{n-1}{r} \psi) F(u)$ $+\frac{1}{2} (\frac{n\psi}{r} - \psi') f(u) u dx$
17	定理 1.5 「をみたす関数 $u = u(x) \in C^2(\bar{\Omega})$ 」	$u = u(x) \in C^2(\bar{B}_R)$
17	(1.31) の積分範囲	$\int_{\partial B_R} \dots, \int_{B_R} \dots$
19	中ほど「であるから, ...」と 「のいずれか一方が...」の間の式	$ \nabla u ^2 + \frac{2}{n} u < c^2$ または $ \nabla u ^2 + \frac{2}{n} u \equiv c^2$
20	下方「である. 関数」と「に対して」の間の式	$N(r) = \frac{D(r)}{H(r)} r$
21	中ほど「である. (1.38) より, ...」と 「が成り立ち, ...」の間の積分の式	$2 \int_R^{2R} \frac{N(r)}{r} dr$
21	下から 2 番目の式の最右辺	$C_m R_0^m (\frac{C}{2^m})^k$
21	中ほど「 p 可積分」	「 p 乗可積分」
22	中ほど、ノルム $\ \cdot\ _p$ の定義, $p = \infty$ の場合	$\ \cdot\ _p$ を削除
22	数式を除いて下から 3 行目	$ \alpha = \alpha_1 + \alpha_2 + \dots + \alpha_n$
22	その下「コンパクトな台」の後	「 $\text{supp } f \equiv \overline{\{x \in \Omega \mid f(x) \neq 0\}} \subset \Omega$ 」を挿入
23	中ほど「...(1.40) の最小化列 ...」	(1.41) の最小化列
24	上から 2 番目の式	$\frac{1}{2} \ v_k\ ^2 = 1 \rightarrow \frac{1}{2} \ v\ _2^2 = 1$
24	中ほどの式「 Ω 上」	Ω 内
24	下「証明された。」の後に加筆	λ_1 が最小固有値であることは 2 次形式の理論, 特にミニ・マックス原理による.
25	演習問題 1.3 「 $v \in H^1(\Omega)$ 」 「 $ v \in H^1(\Omega)$ 」	「 $v \in H_0^1(\Omega)$ 」 「 $ v \in H_0^1(\Omega)$ 」
25	下から 3 番目の式の λ の指数	$\ \nabla v_{\lambda}\ _2 = \lambda^{\frac{2-n}{2}} \ \nabla v\ _2$

27	中ほど「を得る．ここで」と「が成り立つので」の間の不等式の右辺の [] の範囲	$\ f_{n+1}\ _{L^n(\mathbf{R}^n)} \prod_{i=1}^n \ f_i\ _{L^n(\mathbf{R}^{n-1})}$
27	中ほど「が成り立つので」と「となる」の間の不等式の左辺	$(\int_{\mathbf{R}^n} f_1 f_2 \cdots f_n ^{\frac{n}{n-1}} dx_1 dx_2 \cdots dx_n)^{\frac{n-1}{n}}$
27		* 本ページ 2 つの訂正の後, これらの不等式は順番が前後しているので交換する
27	中ほど「この不等式に ...」と「となり」の間の式で初めの等式右辺と, 次の不等式右辺	$= \int_{\mathbf{R}} \ f_1\ _{L^n} \cdots \ f_n\ _{L^n} dx_{n+1}$ $\leq \prod_{i=1}^n (\int_{\mathbf{R}} \ f_i\ _{L^n(\mathbf{R}^{n-1})}^n dx_{n+1})^{\frac{1}{n}}$
28	定理 1.8 の証明. 最後の一文「補題は証明された」	定理は証明された.
28	定理 1.9 の証明. 「不等式 (1.46) は」	定理は
29	定理 1.9 の証明の後の文 2 行目 3 行目の埋め込みの指数	2 行目は $W_0^{1,q}(\Omega) \hookrightarrow L^p(\Omega)$ 3 行目は $W^{1,q}(\Omega) \hookrightarrow L^p(\Omega)$ と訂正
29	その下「滑らかならば... も」	Lipschitz 連続ならば $W^{1,q}(\Omega) \hookrightarrow L^{q^*}(\Omega)$ も
29	その次「埋め込みの定数は $ \Omega $ で」	埋め込みの定数は Ω で
29	その次「コンパクトである」に以下を追加	すなわち $W^{1,q}(\Omega)$ の有界集合は $L^p(\Omega)$ の相対コンパクト集合である.
29	(1.49) 式の前 3 行に 3 箇所	「をみたまふ非負関数 ... に対して , 軟化 (mollifier) 作用素 $(\rho_j * \bar{f})(x) = \dots$ を定義する . したがって , $f \in \mathcal{F}$ と ...」
30	(1.50) 式	$\ f\ _{L^p(\Omega \setminus K)} < \epsilon$
30	下から 2 行目の式	$\tilde{B}_{2\epsilon}(\tilde{g}_i) = \{g \in L^p(\Omega) \mid \ g - \tilde{g}_i\ _{L^p(\Omega)} < 2\epsilon\}$
31	定理 1.11 の証明の始め, 「... 与えられた有界列 $\mathcal{F} = \{f_k\} \subset W_0^{1,q}(\Omega)$ 」	与えられた有界集合 $\mathcal{F} \subset W_0^{1,q}(\Omega)$
31	定理 1.11 の証明の中ほど「 $\alpha \in (0, 1)$ 」	$\alpha \in (0, 1]$
31	最後の不等式右辺の指数	$ \Omega \setminus K ^{\frac{1}{p} - \frac{1}{q^*}}$
31	定理 1.11 の証明の後の一文「十分滑らかなときは」	Lipschitz 連続ならば
31	同じく「 $W^{1,q}(\Omega) \hookrightarrow L^q(\Omega)$ 」	$W^{1,q}(\Omega) \hookrightarrow L^p(\Omega)$
31	その下, $W^{1,q}(\Omega), C^\alpha(\Omega)$	$W^{1,q}(\mathbf{R}^n), C^\alpha(\mathbf{R}^n)$
33	下から 2 つ目の等式における R	$R \equiv \int_{\Omega} p(\int_0^1 \int_0^\theta \rho w + v ^{p-1} d\rho d\theta) w^2 dx$
34	上から 3 つ目の等式	$\ G'(v)\ _{(L^{p+1})^*} = \ v\ _{p+1}^p$
35	1 つ目の等式の真下	「制約条件」は制約想定, 「と $Y = \mathcal{R}$ 」は削除
36	定理 1.3 の証明の最後から 2 行目「 $R(G(v_0)) = Y$ 」	$R(G'(v_0)) = Y$
39	中ほど「関係 (1.56) から」と「となる」の間の式	$-\Delta v = \mu v^p \in L^{\frac{2^*}{p}}(\Omega)$
39	数式を除いて下から 7 行目に 2 箇所	$n > 2$ の場合, L^p 評価から $v \in W^{2, \frac{2^*}{p}}(\Omega)$ が成り立つ. もし $\frac{2^*}{p} > \frac{n}{2}$
39	下から 4 行目の埋め込みの式	$W^{2, \frac{2n}{n+2}(1-\alpha)^{-1}} \hookrightarrow L^{\frac{2n}{n-2}(1-\frac{n+2}{n-2}\alpha)^{-1}}$
40	上, 最初の式	$v^p \in L^{\frac{2n}{n-2}(1-\frac{n+2}{n-2}\alpha)^{-1}}$